

令和四年七月吉日第二版作成

神聖をスムーズに現わすドント

(七月三十一日のお話の内幕)

高嶋善三郎

目 次

- 神聖とはなにか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 本心(神聖)の在り場所と現われる姿・・・・・・・・・・・・・・ 4
- 神聖をスムーズに現わすヒント・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
- 宇宙子を通じて宇宙神とつながっている・・・・・・・・・・・・ 6
- 真理を実践する心により、新たな真理を得る・・・・・・・・・・・・ 7
- 愛の心で人は光を他に与える・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
- 神聖の働きを神に感じぬ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

当資料は、先に掲出させていただきました「神聖をスムーズに現わすヒント」を、オンラインミーティング用に一部変更した内容になっています。

お 願 い

既に作成した資料(バックナンバー)は、ウェブサイト『白光北陸』のブログ欄に掲載しています。

よりの分かりますようにするため、ご感想があれば、お聞かせください。

次の連絡先にお願い致します。

(スマホ) 09-0334-66619

(メールアドレス) zensan@peach.ocn.ne.jp

神聖とはなにか

「内なる神聖を引き出す」(『白光誌』2022年3月号)において、昌美先生は、神聖復活の印を組む前に静かなる呼吸法を行ない、内に存在する神聖の光を認め現わし、その神聖の光を今度は、神聖復活の印によって、強く大きく引き出しだしてゆくことを勧められています。

では、一見新しい神聖というワードは、何なのでしょう。

神聖というワードは、二〇一七年七月に、神聖復活の印として私たち会員に降ろされた時に大段的に周知されましたが、実はそれまでに私たちに知らされていた、なじみの深い「我即神也」「人類即神也」「本心」などのワードとは、ほとんど同一の意味合いであることに気づきます。

「人類即神也の宣言文」の中にある、人類即神也のワードを神聖と言い換えれば、そのことが分かります。

地球上に生ずるいかなる天変地変、環境汚染、飢餓、病気、また世界中で繰り広げられる戦争、民族紛争、宗教対立・・・これらすべて(人類の起る想念つまり神のみ心から離れた想念が現われて消えてゆく

姿であり、) 人類の神聖が現われていくプロセスである。

我と人類とは区別はされていますが、「すべてのすべてであり、無限の智慧、無限の愛、無限の生命である」神という概念の中に神聖と同じ意味合いで表現されていることに気づきます。

また、五井先生のみ教えでは、本心と表現されて解説されていますが、それを神聖と言い換えれば、神聖の概念が明らかになります。

それによると、大自然の根源の働きをする生命を、その智慧能力で、大調和達成のために生かすきってゆく働きとされています。

この神本来の神聖の世界は、愛深き心、美しく清らかな心、真をつくす心、善事をなす心等々、すべて人間生活を高め、深める心のひびきの世界なのです。(『続宗教問93])

また、私たちの内部には神が存在し、内部の神が、外部の神々と交流しあっているのです。この内部の一番奥の神の姿を、直霊といい、その分かれとして存在しているのを分霊といい、直霊、分霊の働きを神聖の働きといい、そしてこの直霊分霊の働きを真つ直ぐになさしめるために、外面的に働いているのが守護神なのであり、守護霊なのです。(『続宗教問答』問90)

一方キリスト教などでは、神は私たちの外部である天にましますといわれていますが、それをどのように理解したらいいのでしょうか。

実は、私たち肉体人間は、チャクラを通して脳天（第七のチャクラ）において、肉体以外の体、つまり幽、霊、神と仮に呼んでいる各階層の体につながっているのです。

神霊の階層の心の波動が、そのまま素直に肉体の脳天に伝わってきている心を本心（神聖）と呼ばれているのです。神聖は自分の頭の中や心臓の辺にあるのではなく、神のみ心と一つのところにあるのです。

しかし肉体人間の脳天（第七のチャクラ）が神界以外の階層即ち幽界から伝わってきている波動に蔽（おお）われてしまうと、神霊の心そのままの働きはできなくなるのです。そのような状況において、神は内側（肉体）の中に存在するのではなく、天に存在すると感じられたのでしよう。そのような時業想念で本心（神聖）を求めても、本心（神聖）を自分のものとして、つかむことはできない。業想念波動を消滅したところから、本心（神聖）は現れてくぬのです。『愛するところ』

本心(神聖)の在り場所と現われる姿

神聖が私たちの内側にある存在であると認識されるようになったのは、世界平和の祈りがこの地上界に降ろされた時からと考えられます。

地上界が分厚い業想念に覆われていた終戦後、五井先生が直霊と合体され、夜明観音として活躍される時からなのです。この時私たちは、五井先生という、天と地を結ぶ大きな光の柱をおして、天とつながり、このことを認識できていたのです。

五井先生著の詩集『純白』の「ところ」に、五井先生が直霊と合体された感激の喜びとともに、本心（神聖）の在り場所と現われの姿が描写されています。

ところよ、ところよ、どこにいる

まことのところよ、どこにいる

探し求めて幾転生

私は、この在り場所を

はじめてしっかり知りました

ここは天にありました

いのちの中にありました

光の中にありました

私の中にありました

こころは私でありました

こころはいのちでありました

こころは光でありました

人と人をましまろく

天と地(つち)をまつすぐに

つなぐ光の波でした

この詩の「こころ」は本心(神聖)を意味し、鍵となる言葉を言い直してみると、次のように本心(神聖)の在り場所が見えてきます。

天は神界の直霊を、いのちや光は宇宙子を、また私は、直霊と一つになった、肉体に降りて来ている分霊魂を意味しています。

そして本心(神聖)は私であり、いのちであり光であるとは、実は、私は直霊の一筋の光の存在であることに気付いた感激の言葉なのです。

人と人をましまろくとは、人々の間に愛と調和を現わした姿(自他一体)を、天と地をまつすぐにつなぐ光の波とは、私達に降りて来ている宇宙子の流れの姿(神我一体)を現わしています。

私達が、神聖は地球人類すべての人たちに内在していることを知らされ、その感覚を取り戻すのは、宇宙究極の光を降ろすご神事を七年間取り組んだ2010年正月、全会員の叡智のチャクラ(第六チャクラ)が正しく開かれ、天(直霊)から直接光を受ける道が開かれた時なのです。

神聖をスムーズに現わすヒント

当文書の冒頭で言及した、昌美先生のお言葉は、神聖復活の印を有効にするには、**まず神聖を認め、自分自身に神聖を現わす**ことが不可欠だと言われているのです。

そのためには真理を理解することでしょう。神という存在について、生命や光とどういう関係にあるのか。神我一体とはどのような意識になることなのか、愛することとはどのようなことをいうのか、消えてゆく姿とは、どのようなことをさせているのか。守護の神霊はどのように加護してくださっているのか。私たちの天命を完うするとは、どのような状態になることなのか。これらを明確に理解することです。

それでは具体的に整理していきましょう。

五井先生がみ教えを解説される前までは、神は姿が見えない存在であ

り、一部の霊覚者の眼と言葉を通して理解していました。ところが神の

姿が見えない肉体意識の人たちは、「万言象をなでる」のごとく、それ

ぞれが自己流に受け止めていたため、天使と悪魔といった二元対立的な

理解しかできなかったのです。また因縁因果という法則についても、

「様々な不幸が現れると、罰があたった。自分はどんな悪いことをした

のか。神様、私を救ってください」といった想念行為に終始してしま

た。そして人間は神の子であるにもかかわらず、過ちを犯しやすい罪の

子（罪悪深重の凡夫）といった認識に陥っていたのです。

これに対して、五井先生は、著書『神と人間』において宇宙神と私た

ち肉体人間との関係を、イラスト図を使って解説してください、肉体人

間の天命について言及してくださいました。

人間は霊であり、肉体はその一つの現われであって、人間そのもので

はない。人間とは神の生命の法則を自由に操って、この現象の世界に、

形の上の創造を遂げてゆくものであると識り、神我一体観、自他一体観

を行動として表現してゆく存在であると教えてくださったのです。

そのみ教えのおかげにより、私たちは罪悪意識から解放され、のびの

びとそれぞれの人生を探究できるようになりました。

宇宙子を通じて宇宙神とつながっている

さらに五井先生は宇宙天使の協力のもと、宇宙の根源のあり方や宇宙

神と私たちの関係について宇宙子科学的に解明されました。私たちが宇

宙子を通じて宇宙神とつながっているという真実は、遠い存在であった

宇宙神との関係がとても身近になりました。私たちは光の子であるとい

う自覚へ至る、大きな足掛かりを得たのです。

人間には、宇宙神から常に放出されている新しい宇宙子が精神宇宙子

として流れて来ており、肉体内にある古い精神宇宙子と入れ替わり、そ

れが物質宇宙子で構成されている、肉体に流れていき、精神も肉体も、

健全に保たれているのです。

しかし肉体人間の脳天（第七のチャクラ）が神界以外の階層即ち幽界

から伝わってきている波動に蔽（お）われてしまうと、新しい宇宙子

が分霊魂に届かず、最初に入った自分の古い宇宙子だけのいわば蓄電池

を使おうとするから、結論的には新陳代謝が行われずに、古い宇宙子の

ままとなり、肉体が時とともに老化し、働きが悪くなるのと同じように、

神霊の心そのままの働きはできなくなってきたのです。

これにより私たちの因縁因果の法則のとらえ方が変わりました。

この世の中のスべての苦悩は、過去世で発した誤る想念（神から離れた想念、業想念）が、現れて消えてゆく時に起こるものであり、本心（神聖）に統一すると、自らの想いで消えようと力なくとも、自ずと消えてゆき、光り輝く本体（神聖）が現われてゆくことを学んだのです。

神我一体とは、常に本心（神聖）と一体になることですが、別の言葉で言えば、どのような業想念が現われようとも、常に本心（神聖）の方に想念意識を向けることを習慣化することです。

愛とは、自他一体、即ち「私はあなた、あなたは私」の関係をいい、元々一つであったものが分れてそれが再び一つになるときに起こるひびきと言われています。私たちは元々波動の高い神界に住んでいた分霊であり、この波動の低い、肉体によって分離された存在の世界に、神界の姿である自他一体のひびきの姿の世界を現わす存在なのです。

守護の神霊は、この肉体界に分霊魂として降りてきた私たちが天命を完うしてはいるものの世に誕生する前から陰になり加護してくれてい

ます。現れようとしている業想念によって大難にならないよう、最小限の小難になるよう業想念を肩代わりして浄め、私たちが神聖に目覚めるよう、また目覚めた人たちに引き合わせるよう導いてくれたり、本心（神聖）への統一がしやすいように支援してくれる存在なのです。従って常に守護の神霊に感謝することは私たちの天命を完うしていくためには、不可欠といえます。

真理を実践することにより、新たな真理を得る

次に真理に基づき、行動・実践していくことでしよう。

真理が理解できれば、どのように行動していけばよいかは自ずとわかってきますが、特に留意するべきことは、消えゆく姿を前にしてどのようを受けとめていくかということでしょう。

教義『人間と真実の生き方』において、「この世のなかのスべての苦悩は、人間の過去世から現在にいたる誤る想念がその運命と現われて消えてゆく時に起こる姿である。」「と」という文句がありますが、この世のなかのスべての苦悩は、何故人間の過去世から現在にいたる誤る想念がその運命と現われて消えてゆく時に起こるものなのでしょうか。この事由を

理解することによって苦惱が大きく軽減されます。

結論からいいますと、消えてゆく姿は、肉体意識そのものの感情の業想念がその運命の形となって光により崩れていく姿であり、存在できなくなるという恐怖と不安の心を発しますが、その心を自分自身だと同一視してしまっているから、苦惱となるのです。自分の意識が業想念とどこのへらに離れているかによって苦惱の深さは変わって来ます。

苦惱をできるだけ少なくするには、自分自身はもとも波動の高い光の子そのものであるという意識を取り戻していく方法しかありません。それを実現するためには、日頃から本心（神聖）に想いを向け続け、業想念を手放す以外にないのです。そのために、本心（神聖）についても統一することを習慣つけることが大切なのです。

五井先生は、統一行について次のように解説されています。「統一が上手くなるのは、一言でいえば、素直に神様と想えるようになること。何事も神様の愛の現われであること信する心で思うことを持ってゆくことなのである。

そして統一とは、人間の業想念、様々の想いを一つに統一（スベール）とであり、このことは人間の業想念、様々の想いを自己の本心の中に一つにまとめゆくことである。本心（神聖）の中には、悪いもの、悪い

ことが、一切無い。完全円満であり、大智慧、大愛で満たされている。

その中に一切の想念を統一してしまうのであり、統一したことでより、そこから生まれてくる智慧能力によって開運もし、安心立命することは、あたりまえのことである。そして雑念が起ってきたら、自己の思いで消そうと思わないこと。すべての想念を追わないということ、消そうと力まないことがよい。どんな雑念も放っておけば必ず消え去ってゆく。

このどんな統一修行でも、自力だけの統一ということとは絶対できない。必ずその人の守護の神霊の援助によるのである。援助というより、守護の神霊が統一させてくれるのである。だから統一にはまず守護の神霊に統一することをいわれており、加護を願うことが必要である。『統一宗教問答』の問125)

ここで統一とは、人間の様々な業想念に把われている、低い波動の意識を波動の高い神聖に戻し、即ち神聖と一つになることにより、その業想念を光に還元することだと言われているのです。

従って統一にとって最も必要な心構えは、素直に神様と想えるようになること、何事も神様の愛の現われであること信することには、このようになることが起こると、「大難を小難にさせていただいた」と神に感謝し、

常に明るく、喜びをまわって笑顔で生きてゆかれます。それが神聖の働きで一体となった生き方になるといわれているのです。

どんな雑念が起ってきてもその雑念に想いを向けないことです。向ける、自分の想いで消すという力で消すことになるのです。

愛の心は光を他に向けよう

神我一体観、自他一体観を行動として表現してゆく存在である私たちが常に直面する課題は、「神の愛をどのように現わしていくか」で、それを解決してゆくには、真の愛の心のあり方を理解することが必要です。

愛の心は、どのような姿で現われるのでしょうか。五井先生のお言葉『愛・平和・祈り』にみる、それは、思いやりというふうにも現われるし、寛容・赦しというふうにも現われるというのです。

思いやりの心は、愛の心が細かい心遣いになって、相手の想いの波に同調しながら光を入れてゆく、というふうな、こちらから相手の心の中に入ってゆく。寛容の方は、相手の心の波、想いの波を、こちら側に受け入れて、自己の心の中で昇華させてしまうことである。

この二つの心があれば、たいがいの人は、その人に好意を持ち、その

人の愛の心を受け入れてくれます。

しかし、この地上界には神界の愛という心がそのまま現われていないと言われているのです。どのように現われているのでしょうか。

愛は執着の想いを伴いやすく、愛の心の流れが、把われの想いで、いつの間、一つの想いに止まってしまい、愛するものが苦しみになり、愛されるものが重荷となり、神のみ心を離れた、神のみ心の中にはない、消えてゆく姿的な業想念波を巻き起こして、そこに不幸や悲劇が生まれ、起るといわれるのです。

これは、普通、愛と簡単にいわれているものは、ほとんどが、業想念(因縁)と業想念との融合によって行われるか、業想念の自我欲望の満足を愛と思い違えているからである。つまり執着、執愛、自分の生命を縛り、他の生命を自我欲望のために縛りつけてしまっているからである。

別な言葉で云えば、純粋なる愛(神)の行為が、直接その光のままに行為される時には、肉体人間にとって、あまりにもその光が強すぎ、峻厳すぎるのを、適当に薄め弱めてこの地上界の肉体人間に適合するようにしてゆかなくては情であるが、この地上肉体界は現在では、神の心と業想念の二つが入り交じって出来上がっている世界なので、情というところは、愛(神)の面と、業想念(執着)の面との、どちらにも働きか

けてゆくので、うっかりすると、愛情だと思っている行為が、いつの間にか、業想念という執着の方に流れていつている場合があるからである。このようになってしまふのは、愛する、ということが、光を他に与えることである、という神のみ心、つまり原則を知らないから起こっている。また、愛されたいのに愛されないのは、自分が相手を愛さないからだということ、その人は頭で知っているかもしれないが、心ではわからないからであると五井先生は言われているのです。

以上から結論づけられることは、愛とは光を与え合うことであり、自分の業想念意識も相手の業想念意識も常に手放し、光に還元していくことが愛を現わす基本条件であるといえます。

苦しんでいる人の苦痛を和らげようと、感情移入して一緒に苦しむことでも、また相手の自我欲望を受け入れることでも、またモノさえあれば、相手は救われることでもないと言われているのです。

神聖の働きを常に感じる

手放すべき業想念のうち、自分の周りの人達から発せられているものは、無意識のうちに受け入れてしまい易いので注意することが大切です。

特にマスメディアからは、自己中心と二元対立の観点から見解が発せられています。それを無意識に受け入れてしまうと、その見解に振り回され、自分や他人を無意識のうちに責めたりすることになります。何故その見解に振り回されるかというと、自分に向けて発せられた見解を受け入れてしまうと、その見解にエネルギーを与えたことになるのです。

このようになるのは、肉体の心の働きであるが、そのもとは、すべて本心(神聖)からくるエネルギーであり、このエネルギーはあなたの選択と注目に従って意のままに動くことを忘れてしまっているからです。

ですから、自分の周りの見解に扱われていると感じたら、それを手放せばよいことになります。この手放す方法は、極めて簡単なのです。「他人の怒り、悲しみ、苦しみを手放します」と三回宣言すれば、本心(神聖)は、それらの扱われを光に還元してくれるのです。

以上神聖をスムーズに現わす主なヒントを整理してきましたが、そのほかに、まだ種々のヒントがあることでしょうか。それらを法友同士でシェアしていけば、お互いの神聖はますますスムーズに現わすことができます。全人類に神聖を思い出させるエネルギーがあらわれ出てくる神聖復活の印の偉力をさらに増すものとすることができるようでしょう。